



地上で吸水するオオムラサキ♂. 2013年6月29日、静岡市興津川支流黒川、小泉金治氏撮影

日本最大のタテハチョウで、♂は翅の開帳が約105 mm、♀は大型で115 mm程度となる。♂は美しい紫色の光沢に輝くが♀は暗褐色で紫色に光らない。

学名は*Sasakia charonda* (ササキア・カロンド) で、属名は今から約100年前の著名な昆虫学者、佐々木忠次郎博士に因んだもの。この蝶は1957年の日本昆虫学会の大会で“国蝶”に選ばれた経歴がある。

オオムラサキの世界的な分布は、中国大陸から朝鮮半島を経て日本列島に及び。“西部シナ系”と呼ばれる分布型をもち、中国西部に分布する同属のクロオオムラサキといわゆる“姉妹種”関係にある。

この蝶は、日本列島では本州を中心に、西は四国・九州、北は北海道西南部に広がり、とくに長野県や山梨県のような本州中部の内陸部に多産地が多い。

静岡県とその周辺部では、おもに南アルプス南側と東側の谷沿いに生息し、天竜川・大井川・安倍川・興津川・富士川などの中・上流域に多くの生息地が見られる。

富士山では、この火山の本体を避けるように、主に北側の御坂山地沿いに分布し、わずかに富士東北麓の小山町や御殿場市に少数の生息地がある。伊豆半島には分布しないが、その理由は、この半島が形成された歴史によるものとみられる。

富士川沿いに“フォッサ・マグナ”を北上すると、山梨県身延町あたりから個体数が増加し、釜無川沿いの北杜市には“オオムラサキの里”という観光施設がつくられている。

オオムラサキは大陸的気候を好み、夏は高温、冬は低温、とくに夏は昼間は高温でも夜間の温度が下がることが必要で、駿河湾沿岸のような、夏の夜が暑くて寝苦しい気候はこの蝶の生息には適していない。

年一回発生。成虫は6月下旬から8月下旬にかけて見られ、クヌギなどの樹液に集まる。母蝶はエノキやエゾエノキの大木（ときには中木）に産卵し、孵化した幼虫は食樹の葉を食べて成長し、やがて食樹の落葉とともに地上に降りて、食樹の根もとの落葉中で越冬する。



オオムラサキ幼虫. 2018年12月16日、藤枝市瀬戸ノ谷